

伊礼

第六十六号



井 栗 公 民 館 刊

伊久礼

第六十六号

はじめに

井栗公民館長 横山正之

今年も地域の皆様の御理解、御協力をいただき文集「伊久礼」第六十六号を刊行し、お届けできることになりました。御寄稿いただきました方々並びに、関係者皆様に心より厚く御礼申し上げます。

今年、早々に中国武漢市で発生した肺炎が広がり、その原因は新型コロナウイルスに依るものと、テレビや新聞で報じられました。中国の出来事と思っていた所、新型コロナウイルス肺炎は世界に広がり、日本でも、アメリカの大型クルーズ船、ダイヤモンド・プリンセス号の船内で患者が認められ、横浜港に入港して対処しなければならなくなり、二月三日から日本での新型コロナウイルス騒動が始まりました。

二月二十七日には突然安倍首相が、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校は、三月二日から当分の間休校するよう呼びかけ、併せて、大規模イベントの休止も検討するようにと要請し、混乱が広がって、マスクの着用、手指の消毒の実施の呼びかけで、マスク、消毒液が店頭から姿を消し手に入らない事態となりました。そして、密閉、密集、密接のいわゆる三蜜の回避、更に、一メートル以上のソーシャルディスタンス(社会的距離)が言われ、社会生活が大きく変化し日常を圧迫しています。この変化はワクチンの開発普及がなされるまで続きます。

ところで、近年いわゆる活字離れが進み、本を読むと言う事が少なくなると、活字本が売れないと言われ、そのため本屋さんがなくなってしまう現象が起きています。

人々が会話する、意志を伝えるには言葉を知らなければなりません。ましてや文章を書くと言う事は尚更で、知らなければ伝えられない事になります。こうした現今の社会現象の中、この文集「伊久礼」の発行が続けられる事は非常に大切なことで、地域の皆様の御努力に対し、改めて感謝申し上げます。

大勢の方々からこの「伊久礼」を読んでいただき、この文集が今後とも長く続けられるよう、皆様の益々の御協力をお願い申し上げます。

令和二年十一月

目次

題字 元井栗小学校校長 故安中久雄（俊道）

はじめに	井栗公民館長	横山正之	2
聞き書きレポ	長岡英一		4
聞き書きレポ	田辺キミ子		10
コスタ・リカ見聞録から「日本人学校」	五十嵐章雄		16
私の山歩き・山ある記四	菅原昭子		21
みんなの食堂 with コロナ	小林邦子		25
笹倉つてヤツは	金子泰夫		26
川柳く佐渡への修学旅行を終えて	旭小学校 六年生		30
作詞 めおと温泉姫小百合	長橋正宣		31
おもかげの女	長橋正宣		31
俳句	井栗公民館 俳句作り会		32
俳句 四季	久和原 賢		34
あとがき	発刊委員長 川越正蔵		37

掲載順不同

「聞き書きレポ」

聞き書きレポとは、地区の方から昔の話をお聞きしそのままの言葉でまとめたものです。昔の話(経験)を次世代に伝える貴重な記録となるはずとの思いから企画しました。

お話を聞きした方

長岡 英一さん(塚野目)

聞き手★五十嵐章雄さん(塚野目)

★戦争に行つて来られたそうですが、今日はその体験をお話ししていただけますでしょうか。

海兵団から通信学校へ

私は昭和十七年九月、横須賀の海兵団に九月一日に入団しました。今でもはつきりわかっているのは、八月三十一日入団する前日に、鎌倉の逗子市に役場の兵役係の人が引率して一泊しまして、九月一日もすごい暑い日だった、カンカン照りで。入団する人、十一人か十人で泊まりまして、トラックの荷台に乗せられて横須賀の海兵団に朝入団しました。十七歳で志願しまして。横須賀の海兵団に一ヶ月訓練に行つたんです。だいたいね新兵に入ると訓練期間は三ヶ月なんです、横須賀海兵団で一ヶ月訓練し、通信の方に志願しまして三浦半島の久里浜の海軍通信学校に入学しました。そこを昭和十八年七月に卒業しました。今でも思い出しますけど、まだその当時は割合に平和で、

米軍の空襲もなく平和でございました。通信学校はあの当時珍しく三階建ての鉄筋コンクリートだったんです。夜みんな各自洗濯するんですよ。あの当時九月に入団して一ヶ月海兵団で訓練して十月の頃氣候のいい頃ですね。夜になるとコンクリートの洗濯場があり、着てるもんとか下着とか、訓練服といって海軍の制服は真っ白でそれを着て訓練するんだけどね、洗濯するときはそれらを足で踏んで、いい加減に絞つてあくる朝三階の屋上に干すの。そうすると目の前が東京湾、すぐそばに千葉県房総半島の木更津や鋸山がよく見えるんです。氣候はいいし、まだ割合平和でしたね。昭和十八年海軍通信学校を卒業して、私は東京通信隊といって海軍省に通信隊というのがあって、東京通信隊の司令部に転勤を命じられました。中には潜水艦、巡洋艦、武蔵とかの大きな戦艦に命ぜられた人もいました。三条の私の同期の古川さんは連合艦隊の船に乗りました。指令部のね。私らの班は三十名、海軍は船の右弦と左弦があつて、兵舎はおおきな体育館みたいな兵舎、一個班が三十名で、長いテーブルがあつて十五人ずつ並んでいました。海軍は分隊で、一分隊、十個班で約三百名、班長は下士官で、分隊長がいました。分隊長は海軍大尉、それから分隊長の補佐官で分隊長、それは海軍少尉、約三百名の一分隊で毎日通信の無線理論、フンツールの訓練受けまして、夜になるとテーブルの上に梁があつてハンモックを下ろしてみんな夜寝るんです。ところがね、入隊した時ね、麦飯が食べられなくてね、一週間位苦労したね。精麦、つぶした麦飯が半分くらい入つていて初めて喉を通らなくてね、ところが、

班長が お前ら今食べないけどそのうち腹が減って食べれるようになる」そのとおりですな。案の定それから食べて。入隊したての頃かな、ハ
ンモックの中で家を思い出して泣いている者

もいました。卒業して三ヶ月くらいしてソロモン群島のラバウルへ、昔オ
ランダの植民地だったんだねインドネシアとか。東京通信隊に転勤命
ぜられたのは十人位いたかな、行ったその夜、初めてバットがあった。

★しごきですな。

あの時ね、昼間は転勤の手続きしたり班長紹介されたりいろんな
事務手続きして、夕食終わって、今日転勤したお前ら夜寝る前屋上
に集まれ」と、全部整列させられて気合入れられて、両手開いて万歳
して脚広げて端からバットで初めてですな。海兵団とか通信学校は一
切なかったんですね初めてだった。だいたい殴るのは、進級しない能力の
ない人がいじめるんですな。あーいう軍隊というところは一日でも早く
軍隊にはいると絶対服従、黒いのを白といわれても「はい」と。陸軍はス
リッパでもってやったけど、海軍はバット。ちやうど急所を上手にはたく
んですね急所を外れて。腿をはたくとへたすると骨折するから。端か
らバッションバッションてね。それでそれでも気合入れられてね。一週
間に一回位殴られたかな。別に悪いこと何にもしてないのに必ず気合
をいれられてね。割合に陸軍と違って海軍は食べ物良かったね。横須
賀にいるときはライスカレー。ライスカレーなんて、家にいてもねわたし
ら子どもの時分なんて食べたことがない、今でも横須賀カレー有名で
すよ。

★金曜日の夜になると出てくるカレーですな。

海軍はいろんな外国に行くから食べ物よかったね。

ラバウルへ

十月に転勤命令を受けて、ソロモン群島のニューブリテン島の東部のラ
バウル第四根拠地隊司令部に転勤命令を受けました。私は海軍に入
ったけど船には乗ってないの。古川さんは船に乗ったけど十四根拠地
隊に命ぜられた。昭和十八年十月かな、いよいよ横須賀護送船団を
駆逐艦四、五艘で組んで横須賀を出発しました。東京湾出る前の日
千葉県の館山で一泊しました。お前ら、明日東京湾出ると命が危な
いから、あの頃アメリカの潜水艦が東京湾出るといいましたから、もしか
つてことがあるから覚悟しておくと随分言われた。覚悟してましたね。
ところがね、運が良かった。小笠原諸島出て硫黄島超えて、トララク
島へ着いたんですな。トララク島に連合艦隊の司令艦隊があつて、上陸
するまで全然潜水艦に会わなかった。今考えるとね、運が悪いと沈め
られて。古川さんも船沈められてトララク島に上陸したんですな。私
はトララク島に三日間位上陸してましたね。いよいよそこから、ラバ
ウルまで三日か四日位かかったかな。まっすぐいかないで潜水艦がいる
んでジグザクに行くんですな。

★魚雷を避けてジグザクに航行するのですな。

トララク島に行くのも一ヶ月位かかった。ラバウルの港に入る右側に
火山が煙をあげてまだラバウル海軍航空隊がすぐそこにいましたね。
有名なラバウル小唄って歌がありましたね。まだ戦闘機とかはありま

したね。ラバウルへ入港して上陸して、根拠地隊の司令部へ。海岸端にはオランダのベランダ付きの住宅がちらほらありました。ラバウルは赤道直下で日中は三十五℃以上でも一暑いんです。南下してオーストラリアやニューギニアは割合に涼しいんです。ところがちょうどラバウルは赤道の下、だから年中暑いところなんです。私ら通信隊司令部は一日四交代で非番の時はさつまいも作ってました。この辺と違って一年中三十度以上で、ある一定の畑を作ると一年中サツマイモが収穫できるの。こっちで収穫すると、苗を植えるとそれが伸びて、次はこちと。日本のことを内地と言つて、内地から私らが行つてから補充が全然来ないんです。弾薬から食料から、みんな自給自足。非番の時は畑、サツマイモしかつくらなかつたかな。食料はだいたい原住民が作つてるタロイモ、タピオカね、タピオカはキヤツサバともいってね、根っこでね芋でんぶん質なんです。野生のパパイアとか食べていました。陸稲を作ってましたね。とにかく栄養失調でしたね。ヤシの汁に栄養があつて毎日飲んで、脚気とかにならなくて、しばらくそんなことが続いてましたけど。今度は米軍の攻撃が始まつて。私たちが行く前に山本五十六元帥がラバウルの隣のブーゲンビル島の上空で戦死している。そのあと行つたの。半年から二、三ヶ月位平和な生活しましたけども、それからが大変でした。とにかく、陸上に建っている建物全部やられた。全部ですよ。結局私ら、通信隊なんか電信通信機とか地下壕の中に、昼間はF4U偵察機が朝になると悠々。こっちから反撃できないんです。たまに二五mmの二連装機関砲でダンダンとやるんですが、やつた

あとそこを徹底的にやつてくる。ラバウル航空隊の飛行機もみんなやられた。わたしら非番で畑にいと、時々急降下して機銃でダアーアーと、畝の間にべたつと伏せて。断片的に忘れていくけど毎日のように空襲はくるんだけど、艦砲射撃は今考えるところすごい、すごいです。あの時ラバウルの周りの島をみんな米軍が占領して、ラバウルだけを残したんですね。陸軍・海軍十万人兵隊がいると、アメリカが最後まで残して、時々来ては空襲したりして。あの艦砲射撃は今でも覚えてる、半日くらいダダアーアーと続いて、あの時みんな覚悟してね、内地からの補充がないために、軍服とか革靴とかいざという時の為に別にしてたんです。履物は車のタイヤのゴムを切つて履いた。靴とかはいざという時、米軍上陸した時に着ようとおもつて、いざとなつたらやると覚悟しているけど、艦砲射撃の時は半日近間ダダアーと撃つ音が聞こえるんです。ダダダアーダダダアーシューシュー。全然、米軍は狙い撃ちしないんです。日本みたいに。ジャングルの端から端までも、そのうち一発か二発は命中するんです。あの時は覚悟しましたね。防空壕の中でヒューー、バアーと、飛んでくるのが分かるんです。私ら十九か二十で若いもんだからね、志願兵もいたけど、若いものはまあまあなんて。ところが、子どもさんが二、三人いる応召兵の三十代の兵隊もだいたい震えていました。私らは若かつたので、深刻には考えていなかったけど考えていましたけど、子どもがいる兵隊なんかはね頭が狂つた人もいた。それだけです。艦砲射撃だけです。だんだん弾着が近づいてくるのが分かるの。終わると周り

は焼け野原で、今考えればホントに運が良かった。

ジャングルへ

昭和十八年、十九年、とにかく建物という建物は全部やられて。昭和十九年になっていよいよラバウルも米軍が上陸するな、上陸したら玉砕するなど覚悟を決めて、防空壕から抜けて山のジャングルに入っただけです。通信隊の人はバラバラになって。米軍はジャングルには入らないです。沖縄はもそうです。海岸端のよいところに上陸するの。米軍もいよいよ昭和十九年の末あたり、私ら通信兵だから情報がみんな入ってくるんです。夜、当直して、オーストラリアのあの当時はメルボルンからの放送がガンガン入ってくるんです。時々ね、あの当時東海林太郎、藤山一郎、小唄勝太郎の佐渡おけさが日本語でジャンジャン入ってくるの。今ね日本は大変ですよ。米軍が日本の町を空襲しています」。だけどね、日本の大本営は勝つてると、退却しても転進転進と退却とは言わない。いま考えるとね、バカみたいな話。オーストラリアからみんな情報が入ってくるの。だけどみんな絶対そんなこと言わないの。原子爆弾が落ちた時も 今広島も日本は大変ですよ」と、原子爆弾を日本は新型爆弾と言った。 あんたがたねいい加減戦争止めて、オーストラリアに日本の捕虜が、百人とか二百人います」とかいうの。私らは東条英機の 捕虜になったら辱めうけるから切腹しろ」と教育を受けていた。ところがね、二百人か三百人が毎日肉を食べたりうまいもの食べていますよ。あんたがたもいい加減止めて、無駄な抵抗止めてね、万歳しませんか」、今ね日本も広島に爆弾が落ちて大変で騒いでいま

す」と情報がオーストラリアからがんがん入ってくるんです。なんでこんな負け戦をやったろうと思っていましたね。実際、日本の捕虜はいるとは思っていませんでしたけど、本当だったんですね。二、三百人いたんですね。日本の捕虜は暴動を起こして脱走して百人位やられたんですね。

昭和二十年に分散してジャングルに入って、ジャングルで何してたでしょうね。毎日ジャングルを切り開いて何か仕事してたんですね。たまに海岸降りて向こうはリーフと言ってサンゴ礁が海岸からずっと千メートル位あつて浅いんです。そこから深くなるんです。たまにタンパク質がほしいので、二、三人で組んでジャングルを抜けて魚を捕りに行くんです。リーフに続く間イワシとかサヨリとか魚がいっぱいいるんですね。手榴弾でやると浮いた魚がバケツにいっぱい二、三杯取れるんですね。三、四人で一ヶ月に一回取りに行くんです。またジャングルにもどる。タロイモ、たまに原住民からヤギの肉をもらいまして食べましたね。そんな生活一年位しました。

★もう戦争は終わっていましたか？

終わる前のことです。ジャングルにはヒルがいるんです。蚊も。蚊帳みたいなのをついたりね。蚊にくわれたりして傷つけるとハエがきて真っ黒になるの、退治しないとみんなハエがくっちまう。火山口のようになってそこは潰瘍みたいになる。潰瘍に栄養分を取られて栄養失調になって。衛生兵はいましたが薬がないんです。あるのは赤チンだけ。治りっこないんです。だんだん火山口のようになってそれがもとで亡くなった兵隊も

いましたね。空襲の機銃があたつて死ななくてもいいのにそれが元でザクロみたいに、ちようど噴火口みたいになって。それから皮膚病、疥癬。マラリアは二ヶ月に一回か一カ月に一回かかって。米軍が上陸しなかつたので、戦死よりもそういう栄養失調で戦病死する人もいましたね。亡くなるど火葬するんですけどね、手首だけ火葬にして、あとは土葬して、その遺骨に名前を付けて遺族に渡すように。同年兵でも九州の人も亡くなりましたしね。私なんかも痩せていたけど、疥癬になるとドラム缶のあつちのお湯に、赤チンぬつて入っていたな。年中暑いから伝染病があるんだけど治療薬、薬が無いんだね。マラリアで亡くなった人も随分いるし、ラバウルに三年いましてちようど七七年前だから記憶は断片的にしか覚えていませんけど、食べ物とはかく米は食べられない。タロイモ、サツマイモ、たまーに魚取つて食べてました。

戦争が終わつて

いよいよ、戦争終わつて日本は万歳して、一ヶ所に集められて、あの時はオーストラリア兵が収容所を管理してまして。毎日強制労働というかジャングルの開墾とかね、捕虜収容所で約一年間位過ごしました。それから毎日米軍のコンビーフみたいな肉食べたりガラツと食べ物変わりましたよね。食べ物がこれじゃ戦争負けるよなと思ひましたね。食べ物も自分で、それから弾薬から何かから違う。米軍が上陸するときには徹底的にやる、日本みたいに敵前上陸なんてのと違う。徹底的にそこをやつてそれから上陸する。それだけでも全然違う。私ら子どもの時分、私は高等小学校しか出ていないけど、その時分は日本絶対戦

争に負けない神国で、いかなれば神様が助けてくれるなんて教育を受けていたでしょ、日本は絶対戦争に負けたことが無い、アメリカ軍は大和魂をやつつけてしまうなんてと、そういうね馬鹿な教育を受けていた。あれを見たらもう、なんでこんな戦争を始めたんだろうと思つた。今でも覚えているが、南京陥落したなんて提灯行列したり、日本は勝つた勝つた言つていよいよとなれば神風が吹くなんて教育を受けていた。実際経験してみてもこれでは全然段違い。先進国に勝つわけないと思ひましたね。収容所に約一年たらずいまして、日本に帰り、横須賀へ上陸しました。今まで三年間南方へ行つていて向こうは年中原色。ところが日本来たならなーんか景色がくすんです。異国へ来た様な気がしましたね。

★横須賀に来たのは何月頃ですか？

五月の半ば頃ですね。三条祭りの頃。横須賀へ上陸しましてね。米軍の兵隊がきて全部裸にされてDDTで頭から何まで全部消毒。それで横須賀でいろんな検疫だとか、予防接種だとかで、三日か四日位横須賀へ泊まつて帰つたんです。横浜駅の前に止まつて駅の前は一軒も無い焼け野原で、今は横浜駅前はすばらしいですよ、ビルですごいですが、何も無いのです。すごかつたんだなど。東京駅の周りはコンクリートのビルは残っているけど、木造の家は一軒も無くて焼け野原です。上野の山はすぐそばに見える一軒も無い。地下道は子ども達がいて。三条へ帰る汽車に乗るといっても窓から乗つて。びっくりしましたね。シベリアに行った人は寒さで大変だった。シベリアの話の聞くと大変でした

よ。シベリアに行った小寺さんは今年亡くなりましたけど、シベリアは環境が悪い。私らは運が良かった。年中裸でいられましたし、食料は野生のものを食べていれば死ぬことはありません。病気だけ気を付けていれば死ぬことはなかった。シベリアはそういう訳にはいかない。冬になれば零下何十度にもなる。パイナップルもあるし、南瓜なんかも年中できましたね。行ったときは原住民は、今はそういうことはありませんが、はだしで腰巻してましたね。

★昭和十九年十月のレイテ沖海戦で、通信隊にいて何か情報は入ってきたんでしょうか。

フィリピンのミンダナオ島沖で武蔵が沈んだんですね。聞きましたけどね。無線で情報は入ったけど詳しいことは分からない。勝ち戦だったんですが、武蔵は沈んだと。通信学校の時東京湾でよく武蔵を見ました。武蔵や軍艦の大和の根拠地は広島の実ですね。

★横須賀だと長門がいましたかね。

基地はほとんど呉の方に行っていましたね。たまに横須賀に行ったり来たりしていましたね。あとミッドウエーね。通信学校卒業した当時、米軍の攻撃で日本の空母が四隻沈んだのが入った。あれを境目に段々おかしくなったね。それまでは何とかしてた。アリューシャン進駐したと入った。通信隊だったからあんまり情報が入って来なかった。負け戦なんだけど大本営はどこどこでと、嘘の情報で私らは何を言っているんだろううと思っただけで、絶対に言えないんです。東京通信隊は全国の根拠地の情報が入ってくるんですけど、そういうことは絶対に言わな

い。特高・憲兵に、もうなんか情報入ると何にもないのに引張られてしまう、私ら半殺しの目に合う。一人ね、半殺しの目に合ったことがある。みんな集められて何百人の前で殴られて気絶して、バケツの水をかけられて。情報を漏らしたんだね。そういうのを見ているので、絶対漏らさない。

★見せしめですね。

昭和十八年の通信隊の頃たまに休みがあって、虎ノ門の駅前に菓子屋の虎屋があつて虎ノ門の地下鉄の駅から遊びに行つて、虎屋のようかんがあつたし割合に平和だった。そのあと東京空襲でやられた。それから空襲があつて、負けたっていう情報は一切ない。あの頃から参謀は船を沈められたり、玉砕とか、玉砕なんて言わない。戦争で三百万人亡くなったというのに。生きて良かった。

今の子どもたちは幸せです

今でも覚えてますけど、昭和十一年小学校六年でちょうどその時支那事変が始まって、それから二・二六事件、ちようどそれを境目に、あの頃からだんだん戦時色に変わりましたね。昭和十六年十二月八日大東亜戦争、今でもはっきり覚えています。支那事変始まってから世の中騒々しくなりましたね。戦時色というかに。今の中央公民館に昔市役所があつたんです。その前に、今は駐車場ですけど、分教場がありまして私ら三年間通いました。昔は一部二部三部四部とあり、私らは一部三年間通いました。私ら子どものころ戦争にぶつかるし、今みたいに車も全然無いし、冬になると道はツルツルしていて、冬は

綿入れみたいな着ていきましたね。学生服着ているのは組で一人か二人、今でいう旦那様の家の子どもだけです。みんなね、袖はツルツル。三年間分教場で過ごして、冬になると炭火の周りで弁当を温めてね。

今の子どもは食べ物自由で幸せですね。終戦後、三条に帰ってきて食べ物がないんですね。まだ配給で。私の母親の実家が白根の農家の生まれなんだけれども、たまに着物持って食べ物交換してもらいに行くの。代は変わっているけど自分の生まれた実家だよ。米は一粒も出してもらえなくて、出てくるのはサツマイモやそういう時代。母親が買出しに行つてくると、親父が米を貰ってきたかと聞いて、米がないと怒つてね。ところがおふくろの姉が保内の植木屋をやつていて、たまにいくと生味噌を貰うんです。その味はもう忘れませんね。その味噌がうまいなあ。今でも味噌を付けた握り飯が好きです。食糧難で、道端の草や、サツマイモの蔓も食べました。サツマイモだかおかゆだかわからないんですね。私ら五人兄弟で末つ子がお腹をすかせていて御飯の度に泣くんです。今考えると可哀そう。本人は腹減つていて小さいのに御飯が無いから食べられないの。今の子どもは幸せです。平和はいです。戦争はやるものではないですね。なんであんな戦争なんてやつたんだろうと。日本の味方はドイツとイタリアしかない。勝つてこないのに。二百万人、三百万人も死んで。

五十分が経過したところで、お話を聞くことを終了しました。長岡さん貴重なお話有難うございました。

お話を聞きした方

田辺 キミ子さん（井栗）

聞き手★市川明美さん（キミ子さんの次女）

キミ子さんは石上で生まれ、井栗にお嫁に来ました。

小さい時の事

私は昭和八年生まれで、中学はなかつたんだよね。デイサービスで行つて隣の人は、私の時から新制中学があつたんだよ」と話してたね。実家の畑と田んぼが忙しくて。父親は手に刈つて 下刈りだけしておくすけ、なら手お前たちでつんだせ」と全部手作業。御飯は親がしたから、ししななくくつつてよよかつた。ハザの下が日影になるから、鋸鎌でハザ下から刈つて少し濡れていても立てておけば、夕方には乾くからと。辺りの人は提灯までつけてやっている家もあつたけど、そんなことしなくても朝早く起きてはよ終わればいいんだつて言つた。やれば終わるからと、提灯つけてまではしなかつたね。遅くまでやると次の日疲れて遅くなるからつて。

★中学に行かなくて何をしていたの？

中学なかつたから、生まれた所は畑や田んぼの忙しいところだった。三条は二・七の市があつたすけ、市のある日 昼寝してらんねろ」、おんについてこいや」親に言われて河原に野菜取りに行つて、野菜を売つたんだすけね。実家は石上で、土手の下にも畑があつた。二・七の市はあの頃、本寺小路にあつた。車が無かつたから、大八車で二、三軒の家

の人と押しごっこしたの。リヤカー無かったから。三軒位同じ坂だったんだ。一人は肩にかけて引つ張つて二人で押して、坂上がれば二人でなくても。いい道・いい坂ねえば坂上がらんねかった。リヤカーなんか無かつたんで、リヤカーなんてしかも遅くなつてから流行つてきたんだ。本寺小路までしかも遠かつたから大変だったよ。野菜取つて用意して乗せて坂上つてたんだ。

★お母さんは市の番したの？

番したのは御精霊様おしよれさまの日かな、十三、十四日は場所どこでもいいから莫産敷いて、夜のうちから寝転んで場所取りの番してたんだ。いつもは場所が決まつていて私の母親が番してた。そんな時自分とこの好きなもん売れるんで。しかも広かつたなああの頃ね。春はほうれん草にじゃがいもお花も持つて行つた。玉葱はおそなつてからはやつてきて、オラ小さい時なんて売るほどなかつたんだ。夏はきゅうりにナス、秋は大根。市行くと苗屋とか種屋かと店出する、これからあれがいいろ、これがいろいろ種屋に言われて買つて来たんだ。私の母親が「こら辺はそれでも良いんだよ。市には菓子も何でもあつて、野菜売つたお金で買つて帰らつる」て言つた。市の帰りの土産が楽しみだったね。かりんとうやバナナとかね。稲刈りの時に、今日の市土産は何だかもろて来いや」とオラよっぱら上のもん(姉や兄)に言われて、小走りにとんで行つた。それ食べて又ハゼワに稲掛けしたりしてたんだ。

★長岡の空襲は見たつて言つたよな？

見たよ。よっぱ天上にとてぎねすこかつたよ。長岡空襲はマツペロンの

坂の土手を上がつて上の方で空が真っ赤に焼けて煙だらけで、風がくると煙がくるろ、すごかつたね。長岡すっかり焼け野原になつたんだね。四年生位になると結構覚えてるね。そういうのは忘れないんだ。

★競馬場の真ん中にも畑があつたんでしよう？競馬があると畑できないとか、競馬がないと畑ができるとか。

競馬場の輪の中にも畑があつたんで。今日競馬があるかどうか聞いて「こいや」言われて、聞いてきたりしてき。競馬があると畑が出来ねから。

★畑、田んぼ手伝つてあと何してた言つた？

あの頃既製品なかつたから、近所の人から糸解いて編んでくれとか、素人は脇からほどくとからまつてね。今なら既製品が何でもあるけど、あの当時既製品なんてものはなかつたから。

よっぱどいっぱい知つてる人の、とつくり(タートルネック)らの前開きのセーター(カーデイガン)らの簡単なような編んでやつた。昔の編み機で。

★小学校下がつてからどこまで習いに行つたの？

友達の茂子さんと彼女の親戚の人がやつた編み物教室に、編み物習いに行つたの。奥さんが教えていて旦那さんが消防団員で寝ないで帰つてくるでしょ。私ちよつと失礼するわね、なんか食べさせんばねえて「つて。オラに教えて後ろに引込んで、食うの出してらつたんねかね。石上から荒町の坂下りたところまで、なりは身長小さいのでつかい

重たい編み機持つて通った。先生が「もしだったら機械ここに置いて、^{できさる}なるどころまでしてくればいいよ」って、よう言われた。よっぽど^{とて}重てかつたて。

★井栗に来てから、おかあさんは家にて夏は植木屋さんに草取りとかの手伝いして、冬は編み物で人の物を編んで生活費稼ぎして、夜遅くまで一生懸命したって言ってたよ。

あの頃既製品なかったから、毛糸ならどうやらあった。夜遅くまで一生懸命編んだ。編み機の音がうるさくて悪いね」言うとお父さんが「いや」言ってた。

★あの頃は赤ちゃんが生まれると毛糸をあげたものなんですよ。

真つ赤(毛糸)の肩からちよつと広くしてひだ取って縮めてさ、長いワンプースみたいにして編んであげたね。昔ね。いつの間にか年取ったね。

★お母さんの二つ下の弟、種治おじさんが自伝本「あゝ青春」を出して、何年前に長岡のホテルオークラの出版パーティーに二人で行ってきたよ。私は知らなかったんだけど、その本にお母さんの父親がきゅうりの種を採っていたことが書いてあるよ。

きゅうりの種を採るってわさ、日陰で赤っかになるねかてぶら下がって、仲間三、四人集めて、これどーらかな、こーらかな「言って研究していたね。茶の間いうたってたいた所では無かつたけど。私の父親は頭いかつたんだ。私は似なかつた。しょうがないね。

「キュウリ種採取組合」

父はもう一つ大きな仕事をもっていた。石上胡瓜青長の種の開発

だ。種は無断で勝手に作って販売してはいけないのである。父が何年もかかって、メンデルの法則の実験を繰り返して作った改良品種である。特許があるのである。」

あゝ青春」外山種治著より 抜粋

★盆踊りで友達と夜通し踊って帰って来たって言ってたでしょ？

親に「朝三時らろ」言われてね。こそーつと知らんぷりして寝たね。

★誰と踊りに行ったの？

大仲の茂子と友達がいっぱいいて、今日盆踊りられ」と、茂子と光子とオレと行ったけど、よし子は父親に「淫裁仲間の女ごどもで行くんじゃねえろ」言われて出れなくてね、あの頃は良かったね。行これ、行これって。

★石上の何処に踊りに行ったの？神社？

石上の神社。終わりになると、また明日も神社であるから来いよ」言われて、うら盆まで踊ったよ。

★井栗に嫁に来てからどうだった？

井栗の家は子どもがいっぱいで、オラが嫁に来たときは長男もその嫁もいたし、お父さんの下にもいた。お父さんが一生懸命働いてらつたけど、おじだ^{次男}からいつまでも実家にいらんね。家の畑や田んぼだけをみんなして働いていても現金収入が無くて大変だった。そうしているうちに、会社を立ち上げるからと誘われて、弁当持って働きに行くよ

うになつたんで。弁当を詰めてると 弁当なんか持つて稼ぎに行かたつていい」、弁当持つてくのはロクなもんじゃないつて、姑に言われてた。でもお昼もどつかで食へんばダメらねかて、黙つて詰めてた。農業を止めて働きに行くのが嫌だったんだらうね。お父さん四九歳で亡くなくなったけど、遺族年金も貰えて子ども達も育てられた。お金だね。

★嫁に来た時水汲みしたの誰だった言つてたかね？

風呂は川の水汲んでたね。釣べ肩ねてさ。風呂の水はあん長にや男の嫁が汲んで、お次男の嫁はそんげことしんたつていい」言われてオラしねかつた。大きな川（改修する前の布施谷川）に汲みに来たもんだ。飲むのは井戸のポンプで汲み上げて、いい水出てくるのを飲んで。あの頃そんげ風呂なんか入らねかつた。風呂の水汲むつて大変だもんね。力の無いもんはダメらの。

★電気が入ったのはいつ？石上にいる時？

〇〇さんが生まれた年、電気が入ったんだつてさ。あの頃紐長くして、こつち持つて行つたり、あつち持つて行つたりしてたんだ。線ながながこつちがしてたんてね。電気が入ったから電が付く「電作」つて名前付けたつて聞いたから、その人私よりも上だから、だいぶ前だろかね。

★嫁に来るとき嫁支度して「こつちに着たら写真撮つてくれるらう？」つて言われてきたけど、こつちで撮つてくれなくてね。みんな準備してもらつたのに、写真撮つてもらえなかつたのは可哀そうつて思った。嫁に来た時着てきた羽織は、何かに作り直したかね？

何に変えてたろかね。袖が振袖みたいに長いから。布団だったかな。

★おとうさん次男夫婦はずつと家にいられないから、しばらくして二人でかんいしや癩医者かんいしやろんが引つ越して空き家になった家を二軒で借りて住んでたんでしょ。

ああ、そうらね。昔子どもの医者が無くて、癩かんいしや医者言つて、癩が出たとか、気短になつて物投げたりしたんで。今の親は良く育てている。

隣の部屋に男の子もいて、親が帰つてくると 卵焼き、卵焼き、お土産、お土産」つてせがんでたね。

★その後、今の駐在所の後ろ辺りに借り家してたかね？

その時にお明美さんめ明美さんことを帝王切開で産むのに三之町だかの病院に入院して退院して帰つてきたら、鏡台の鏡が大風にやられてひっくり返つて割れてしもてねえ。大風らつたねえ。

★オシメ洗うの大変だつたつて言つてたよね。

シメも大変だった。炬燵つてあつたつね。いい加減になる（乾く）と炬燵の布団かけるいつち下つちに入れて乾かしてね。

★オシメはどこで洗つた？

オシメは駐在所の脇の細い川で洗つた。あんまり変な所で洗えないから、ちようど段々があつてねよかつた。今は紙オムツで便利でいいよね。

★河川敷の畑もしてたよね、朝何時に起きて行つたの？

あの頃、仕方ねんだ。あつちに行つてそこそこ明るくなる頃だから、三時頃起きたの。上のほつてくだ下くだるんだすけよつばら時間かかるんだ。畑野菜作りに行つて、帰つてきて仕事行つて。

★そこまで四十分位かかったの？

よっぽらかかったね。四十分位、そんなかかったかな。今こそ車もあって便利だけど自転車でも景雲橋を渡るのに(信濃川の土手を)上つてずつと下らんばだめらつけれ。井戸場の畑って言うたけど。橋(景雲橋)がなかった頃は舟で川(信濃川)渡っていたんだ。渡し場で「おい、おい」と呼んでもなかなか聞こえなくて来ねもんだから、父さんが「いや、いや。俺が取りに行つて来るつや」言うて、泳いで舟を取りに行つて渡つた時もあったんて。水も少なかつたんだろうね。その畑に小屋建てて、寝泊まりしたりながら畑したこともあったね。その小屋に赤ちゃんのおめこと寝かせて畑したら、地震(新潟地震)がきて、慌てて小屋まで見に行つたつけれ。畑が地割れして、よっぽ大変だったね。

★船頭さんとかいなかったの？

向こう岸の小屋はカギ様も掛かっている、お湯を沸かしてお茶も飲めるようになってたんで。そこで、じいちゃん達二、三人と船頭さんが話して聞こえねかつたんだろ。

★小さい頃こに野菜広げて店してたよな。

あの頃ね、店が無かつたから野菜が割合と売れたんてね。村持つてきて、トマト十個とか買ってくれる人もいたからね。野菜持つてくればトマトでも何でも売れたんてね。今なんてそこらじゅうにお店はあるけど、あの頃はねかつたんてね。みずほ団地によく売りに行つたね。あの頃お店がねかつたから良かったんだろ。

★踊りの会にも入っていたよな？

私は踊りが好きでね。豊優会っていう踊りの会があつてね。踊りが好きだったからね、そこに入ったんだ。中央公民館で四年に一回ある発表会で、四回位踊つたね。緊張していると、先生が「ここで練習していいよ」と言つて、裏の方で稽古して「こは間違うな」と言われた。先生が陰で見てるからね。佐渡おけさだの三条おけさだのみんな踊れるよ。大好きだった。三条おけさは面倒なんだ。前行つたり後ろ行つたり。三条音頭は簡単だよ。手ぬぐい持つてヨイヨイヨイと踊るの。三条音頭は簡単だよ。手ぬぐい持つてヨイヨイヨイと踊るの。三条音頭はおそなつてからはやつたんだね。やっぱりおけさだ。

★今は、元気な人なら自転車に乗つたりもできるけど、心臓が弱いからすぐ疲れてね。無理した時は、寝てれば治るつて一ヶ月位寝ていたよな。そうしたらトイレの前で尻餅ついて、足の小指の骨にヒビが入つて、オムツして暫く寝たきりみたいになつたね。二、三日したら、歩けるようになったけど「おら、オムツでいい」と言いつて言い出して、しばらく紙オムツをしていたよな。何日もお風呂に入らないで寝たきりでしたら、デイサービスの人「お風呂に入るだけでもいいから、半日でも来ませんか。ここにいと寝たきりになって大変だから、行つたり来たりするだけでもいいよ」と言つてもらつて、デイサービスに行っているうちに、ちよつとずつ体力が付いてよかつたよな。

でも今八十七歳らいね。身がおもとて大変だて。

★トイレだけでも自分で行つた方が良いつてデイサービスの人に言つてもらつて、紙オムツしないで自分でトイレに行くようにしていたら、ちよつ

とずつ体力がついて、寝込む前位まで体力が戻って良かったね。

「デイサービスは風呂が一番だね。年寄りなんて風呂が一番だね。普通の風呂だと入るのがなかなか大変だけど、デイサービスの風呂はプラスチックでよく出来てるんで。人が入るところが外れて、入ってしても職員が「田辺さんいいかね？」「いいですよ」と、蓋が閉まるの。温度温度温度言うから、そんげあつちえ風呂なんか入らねて」田辺さんぬるいほうがいいんだね。ゆつくりでいいね」って、職員の人に言われて、その通りだて。風呂の順番もその場所に歩いて行くとや、「いいかねいかなね」、やっと疲れが取れたのに「そんげ早よなんか入らんねて」。なんだって早よ早よいうんで。隣の昭和九年生まれの人は「オレは早よ来るけど風呂に一番に入ったことが無い」って、よっぽど一番に入りたいんだね。私は早く行っても一番に入ることない。デイサービスに来てる人はだいたい紙オムツしてるね。便利でいいけどね。

★でもお母さんゴムの所が痒くなつて、紙オムツが嫌なんですよ。「こんなダメだ」って、取って捨ててたよね。

オムツなんてダメらて、ゴムの所が痒い痒いになつてダメなんて。しっかりしてるようだけど、だいたいの方は紙オムツしてる。包んで捨てればいいんだねかて、新しいの持つてきて履けばいいんだろ、私は紙オムツ大っ嫌い。脇がね縦横縮んだりするの便利なんだろうね。跡がついてかゆかゆになる。大っ嫌いだね。自分のパンツが一番いい。

★今は押し車につかまって、震えているけどなんとか歩いているよね。

★光子さん(子どもの頃からの友達)がちよこちよこ電話くれていたけ

ど、「おれダメらつけれこの電話が最後らよ」って、だいぶ前に電話くれたね。これまで一ヶ月に一回は「元気らけ？」って電話してくれてたのに、それから電話が無いね。

腰手術したけど調子悪くて、腰からきて膝も左も右も調子悪くて「この電話が最後らよ」、それから電話来ねもん。あれで最後なんだから。

★歯が良くて歯間ブラシで磨いたり、元気でよく歩いていた友達が病気になるって、しばらくして亡くなつてしまつたよね。りんご持つて顔を見に行つて、大雪の年だつたね。歯が一番大事つて聞いていたけど、無理するのも良くないね。歯医者さんで入れ歯の具合をよくしてもらつてから、ポリグリップ付けなくても上手に食べられるようになったよね。

入れ歯でも上手に食べられるよ。

六十分が経過したところで、お話を聞くことを終了しました。田辺さん貴重なお話有難うございました。

(追伸)最近(十一月)、「これが最後の電話らよ」と電話をくれた光子さんから電話がありました。本当に長い間電話が来なかつたので心配していましたが、とりあえず良かったです。

「コスタ・リカ見聞録から『日本人学校』」

五十嵐 章 雄

昭和六十二年度派遣教員として、サン・ホセ日本人学校で研修しました。コスタ・リカに興味のある人や派遣教員を目指す人達の参考になればと三年間の研修報告を帰国後まとめました。その中から日本人学校について抜粋します。今から三十数年前のことになります。ご承知の上お読みいただければ幸いです。

開校までの歴史

サン・ホセ日本人学校の歴史は、補習校時代から教えるとかなり古くまでさかのぼらなければならない。種々の断片的な知識を書き並べるよりも、ここでは学校要覧に載っている沿革の序文を転載した方が良いかと思う。特に、人見大使の挨拶の冒頭 みなさん、今までに自分の学校を創ったことがありますか。」という感動的な言葉は、この学校が続く限り、語り伝えられることと思う。(後年、人見大使は日・コ友好協会発行の機関紙の中で、コスタ・リカ在勤中の最大の思い出は、学校を創ったことです、と述懐しておられる。)

開校までの経過

一九六七年(昭和四十二年)、当時コスタ・リカには日本語を教える学校はなく、日本人子弟はすべて現地校に通っていた。しかし、日を

追って日本語が貧弱になり、親たちから憂慮されていた。そのため日本人会が中心になり、本国政府の援助も得て日本語普及講座が開設された。依頼されて小林俊一氏が講師に就任した。以後、約七年間続くわけであるが、この間、場所が各家庭持ち回りになったり、児童によつてはバスを二回も乗り継いで通うなどもあり、児童、教師それぞれに困難が多かった。その後、講師に中島次郎氏、大使館の高橋脩氏を迎える時期もあつたが、多くの方々の熱意により授業は順調に続けられた。

一九七三年(昭和四十八年)、日本人会の学校開設への要望が強まり日本人会総会において、全日制日本人学校開校要望書を決議した。同時に講師一名の派遣要望も合わせ、人見鉄三郎大使に提出、本国政府への取り次ぎを依頼した。人見大使、石田領事、前原書記官も大変な熱意で、貴重な助言や各地の日本人学校の資料を、提供してくださった。その年の十二月には、海外子女教育の重要性が国内でも認識されつつあつた機運と相まって、更には本校の補習校時代の実績も評価され、パナマ校と同時に認可された。また、近い将来に自分たちの校地や校舎を持つことに日本人会の意見がまとまり、早速に候補地の検討が始められた。

一九七四年(昭和四十九年)、学校開設許可にとまない、当面の問題として校舎の決定、教材教具の整備にとりかかると同時に、並行して校地の取得、校舎の建設の計画も相談された。さし当たり校地の取得が急務となり、以降学校設立準備委員会(前年九月に発

足)はふたつの問題を抱え、多忙となった。

同年六月には校地候補地として、サバナスール、セメンテリオ付近など、いくつかの中から諸条件にかなうモラビアが選ばれ、契約の運びとなる。契約金は企業からの借金によった。一方、サバナノルテの大きな二階建民家を借り、仮校舎にすることとし、朝田委員が中心となり改装を始めた。また、一月提出の免税措置申請の内容が大蔵省基準に合致しないため認可が下りず、企業よりの寄付を募ることも多く資金面の苦労が多かった。そのため仮校舎に必要な教具購入に際しても、ホッチキス一個を予算に計上するなど大変であった。また、日本人会婦人部による開校援助バザーは多大な収益を上げると同時に、在留邦人の心を開校へと固める大きな要因となった。

九月二十九日、「みなさん、今までに自分の学校を創ったことがありますか、・・・」この人見大使の言葉は式場を感激に包んで、開校式が行われた。

十月一日、授業開始、サン・ホセ日本人学校の歩みが始まった。

(サン・ホセ日本人学校要覧より引用)

こうして開校したサン・ホセ日本人学校は、コスタ・リカの治安が良いことから、紛争の続く中米に進出した企業の社員の定住地として生徒数も順調に増加していく。

昭和五十六年には過去最高の六十九名の児童生徒数を数えるに至った。しかし、その翌年の十一月九日に起こったナショナルの支店長

誘拐未遂事件を境に、翌年には児童生徒数が半減してしまうのである。この事件は真に不幸な事件であった。誘拐したのはサルバドルのゲリラということである。市の西のはずれにあるサバナ公園付近で警官と撃ち合いになり、警官の発砲した弾が小菅氏に当たったのだという。重体のまま救出された氏は、その後死亡し、コスタ・リカに進出していた企業はアブの総発ちのごとく一斉に引き揚げていった。先年パナマでもノリエガ將軍のクーデターの時、百数十人いたパナマ日本人学校の児童生徒が激減したが、パナマの話を知るところによれば、授業中に突然、親が子どもを連れに来て、そのまま帰国してしまう例があったそうである。航空券の入手もままならない状態だったというから、やむを得ないと思うが、海外ではいつ、どうなるか分からないという見本のようなものである。当時のコスタ・リカやサン・ホセ日本人学校の様子はどうだったであろうか。

現在のサン・ホセは平和そのものである。日本人学校も三十名台の児童生徒数を数えている。一時の隆盛から比べれば寂しい限りではあるが、子ども達は元気に歓声を上げて校庭の滑り台やジャンブルジムで遊んでいる。過去の事件など知らない子どもが殆どであろう。滑り台の根もとのコンクリートにひっそりと「小菅容子氏寄贈」という文字が年月に耐え薄く見ることができのみである。

日本人学校の一日

日本人学校の一日は、スクールバスを出迎えることから始まる。日本人の家庭は、その殆どがサン・ホセ市内に居住しており、およそ二つの地域にまとまっている。

一つは市の西側、日本大使館を中心としたサバナ・ロモセル地区である。ここは昔、市街地のはずれで飛行場などがあつたのであるが、現在は総合グラウンドや公園になっている。日本から進出したスーパーであるヤオハンも、この地区にある。大使館関係の人達、ヤオハンの人達、その他わりあい古くからいる人達が多く居住している。

もう一つは、市の南東部に位置するロス・ジョセス地区、一説に、コスタ・リカの青山（もちろん東京の）と呼ばれるごとく、閑静な古くからの住宅街である。私達家族も、ここに三年住んだ。家賃は高いほうであるが、何よりも治安が良い。住んでいる人達もサン・ホセ市内でも上流階級と思われる人で占められていた。他国の大使館も多く外国人の多いのも特長である。こちらの日本人は商社、民間の会社関係、それに学校職員といったところである。

最近になって日本人が増えてきた地区にグアリア地区がある。ここは日本人学校があるモラビア地区のすぐそばで、やはり高級住宅地といった趣があつた。

さて、学校からのバスは二台で、サバナ方面とロス・ジョセス方面を回る。一台は日本船舶振興協会から寄贈された大使館ナンバーのスクールバス。運転手のカルロス是最初からのベテランで時間は正確、事故も

無い。慎重派である。もう一台はチャーターバスで、民間のバスを契約して朝と昼に運行してもらっている。この国ではバス一台持つていれば、路線、観光、スクールバスと何でもこなすバス会社の社長である。チャーターバスの運転手ヘルドも、そういう人である。彼もまた、時間にはきちんとしている。コスタ・リカでこういった人間を探すのは難しいのである。運転は少々スピードを出す、子ども達の送迎は責任を持ってやっていた。玄関に子どもが入るのを見届けてから次の家へ行くのである。

朝七時十五分、二台のバスから元気な声とともに子ども達が降りてくる。天気はほぼ一年中晴れ。さわやかである。正面の入り口の鉄格子の脇にはグアルダ（警備員）が立っている。三十数名の子ども達の中に入ってしまうと門の鍵を閉めてしまうためである。自由に出入りできないが、牢屋にいるような感じはしなかった。やはり自然の多い環境のせいなのであろう。学校に入った子ども達は、すぐ池の周りや、遊具で遊ぶ。中学部の生徒は委員会の仕事をしたり、前日の復習などで机に向かう者もいる。小一から中三までいれば、行動も多様である。

七時二十分、チャイムで職員の朝会。これは国内とほぼ同じ、校長を除く派遣教員が一週間交代で司会をしていく。

七時半が掃除開始。小一から中三まで縦割りで七〜八班に分かれて掃除をする。石の床なので拭いた跡がはつきりせず、やりにくい、上級生の指導で小一もけっこう雑巾で机などを拭いている。年中同じ

気温であるから手が冷たくなることはないが、乾季のときは机の上など砂でさらさらのこともあり、掃除は重要である。

七時四十分、掃除が終り朝の短学活。七時五十分からは一時間目の授業である。四十五分の授業で小一から中三までが学習する。低学年にはやや長く、中学生には短い時間であるが、やむを得ない。これが昼休みをはさんで七時間目まで続く。もつとも小学部の七時間目は空き、友達と遊んだり、クラスの仕事をしたりする時間にあてている。中学生はしっかり勉強。日本の中学生と殆ど同じカリキュラムに加えて、スペイン語会話、英会話もこなすので、かなりハードである。また、週休二日制をとっているので、国内の土曜の時間も平日に割り当てる。そのため、教育効果から考えると、これでいいのだろうかと疑問に感じるときもあつた。

昼食は弁当である。世界の日本人学校で給食を実施しているところは数校しかない。少人数の学校が多いこと、人手、施設を造る際の費用、それに衛生面の認可の問題等があるため実施は難しい。

家庭の味を味わえるのはメリットであるが、朝の時間が日本の学校に比べて早いので、母親の負担は大きいものがある。五時過ぎには起きて弁当を作らなくてはならない。また、単身で派遣されている教員にも負担になるようである。加えて、下手なものを詰めていくと、せまい日本人村のこと、あつと言う間に父兄の知るところとなるのも負担の原因となるようである。

ともあれ毎日が初夏のいい天気である。クラスの七く八人の子ども

と今日は木陰で、明日は池のほとり、と場所を替えて食べるのは楽しい。毎日が遠足気分であつた。

しかし、先生方の考え方もあり、食事のマナーをきちんとさせようとする学級は、教室で食べるが多かつた。かく言う私は週に一回は教室と決め、あとは子ども達にまかせておいた。日本からビデオテープが届いたといつて学校へ持つてくる子どもがいると、視聴覚室のテレビを見ながら、食事をすることもあつた。

乾季の午後は暑い。スレート一枚で葺いた屋根であるから、ほぼ真上から照らす太陽が、もろに頭上からふつてくる。オーブンの中にあるようである。机の上などは日なたにるように熱くなる。教科書を広げておくと、乾燥して紙が丸まってくるのである。

雨季は雨季で、音がうるさい。一年のうち何日かは、雨の音で授業を中断しなければならぬこともあつた。そして、屋根の隙間から雨漏りがしてくる。これは校舎の老朽化に伴い、年々ひどくなつていった。なにしろ標高が高い上に、真上から太陽が射すので、紫外線の量は相当なものである。パッキンなどのゴムの部品はすぐだめになるのである。

七時間目の授業は、また別の苦勞がある。小一、二年生は六時間目から空き時間、三く六年生も七時間目は空きである。中学生が授業を受けていると、元気のよい喚声が聞こえてくる。小さい子どもに静かにと言つても、つい忘れがちになり、鬼ごっこなどでキヤーカー大声を出すのである。仕方がないと言えば仕方がない事であるが、小中併設の悩みの一つであつた。もつとも、広いグラウンドを持つサン・ホセ

日本人学校は恵まれていたと言える。しかし、雨が降れば屋内で遊ばざるをえず、やはりうるさかった。中学部の七時間目の授業を技術など技能教科にすれば良いのであろうが、少ない教員をやりくりして担当しているので、時間割編成上ままならず、じつと我慢が現状であった。

七時間目が終わると教師も子どももほっとする。学級で短学活を済ませたあと、全員が講堂に集会し、全校帰りの会をする。これも少数ならではの特徴であろう。司会は週番の先生が行なう。全校にかかわる連絡が主であるが、注意、子ども達からの連絡などもあり、なかなか活発である。時々クイズを出したり、学習の発表などのあることもあった。また、卒業式が近付くと別れの言葉や式歌の練習にも使われるなど、有効に利用されている時間であった。

帰りの会の最後はさようならの挨拶である。これがまた大変。児童が前へ出てやりたがるのである。面白いもので小六以上の子どもはやりたがらないが、低学年はやりたくてしょうがない。不公平にならないよう、代表を決めるのも結構難しい。忘れ物のなかった学年とか、クイズに正解した人とか。司会の先生の裁量で前に出た子どもの合図で、毎日元気な挨拶が交わされるのである。

午後三時、帰りの会も終り、低学年から道路に駐車しているバスに向かう。もちろん全員の先生が見送りである。二つの方面へ向かうバスが、それぞれ反対方向へ走り去る。中の子ども達がいままで手を振りながら坂の下へ消えるのを見届け、職員室へ戻ると、本当にほっとす

るのである。



私の山歩き・山ある記四

菅原 昭子

忘れえぬ山行、それから

一九九六年、下の子どもが小学校に入学し、子ども達の夏休みでいよいよチャンス到来。十年長い間温めておいた南アルプス南部の縦走計画。私はこの夏四十歳、もうあまり呑気に構えていられない。家族にお母さんの夏休み宣言！職場の休暇も何とか調整できて最大難関クリア。前夜発六泊七日テント担いで単独行。樺島から入山し聖、赤石、荒川三山（前岳、中岳、悪沢）塩見、三伏峠から塩川へ下山。光はどうした？せつかくのチャンス本当に残念だが休暇不足で泣く泣く割愛。紙一枚を減らしながら減量に努めようやく二十三kgに荷物をまとめ上げた。初めてのビッグな単独行、緊張しそれなりの覚悟を持つて出かけた。

長年の思いが通じたか、連日行動中は良い天気にも恵まれた。独走の私には毎朝 晴れこれ程心強いものは無かった。しかもこれもこれも経験、最後にドッキリのおまけ付。塩見のテント場（確か二年後には幕営禁止）でテント設営後、正に晴天の霹靂！自然を舞台に雷電凄まじく雷雨、雷鳴、稲妻による大編成のオーケストラ出現！地球のエネルギーを見せつけられた。まだ行動中の人々が案じられた。こんな時にも山小屋のスタッフは手際よく軒下にビニールシートを広げ天水を集め

ている。山小屋に到着した登山者達は口々に「怖かった」と。安全圏にやっどこさ逃げ込み緊張感から解放されていた。

この山行で沢山の貴重な経験をした。赤石岳の登りで迎えた夜明け、モルゲンロートなど壮大な南ア三〇〇〇mの景観に息をのみ心躍らせられた幸福感、人の手による環境汚染トイレの現実にも胸を痛め、一人で行動することの意味を考え、イギリス人ナオミさん始め単独行の岳人達との心温まるミニ交流。山から帰っても山の余韻が暫く続いた。ジャーナリスト本多勝一氏は高校生の時、中央アルプス南駒ヶ岳登山の印象が忘れがたく二百枚もその登山記を書いたという。私にはその思いは分かる気がした。これだけの長編には程遠いけれど、私も自分の山行記を書いたから。忘れがたい山行の一つ、この山行で自信がついた。以後テント担いで夏山単独行が何回か続くことになる。

山女子？スタートの頃、昭和五十一年私は三条の山の会に入った。若い時期に山の楽しみと厳しさを知り得た事は幸いだった。山を教えなくて、同行してくれた山の先輩や仲間達には心からの感謝である。今では気心の知れた四十年超の付き合い。私にとって彼らは敬愛の念を抱かせる大事な人達。年月は絆の熟成に十分であったが、その分お互いに年を重ねいつしか一緒に出かけられる山は遠くになつてしまつた。

さて六十一歳からのセカンドライフはどのように山を楽しもうか。これまでとそれから、山に向き合う私の思いや登山スタイルは歳相応に変化した。体力の衰えは本人が一番知っている。必ずしも行ってみた

い山Ⅱ行かれる山』ではない日がいずれ来ることも理解できる。行きたい時に行かれる山へ。四季折々の移ろいは天からの贈り物、近くの山で定点観察もよし、ミヤマキリシマ満開の頃、九重坊ガツルあたりでテント泊。これもいいだろうなあ・・・

山行ノートから

粟ヶ岳 一二九三m 加茂口より

令和二年一月十一日(土)晴れのち曇り

正月の会山行は参加できなかった。遅ればせながら、せめて粟の小屋七合目くらいまでと思うも、雨や雪マークが続く冴えない天気。そんな中でやっと見つけた穏やかそうな日、午後三時まで持つとの予報に期待して出かける。三合目に着いても気になるほどの雪は無く、四合目下あたりでやっと雪道に。カモシカの新しい足跡を発見！辺りを見回すも姿は見えず、残念。六合目のピーク、ビュウポイントで一息入れる。さすがに守門は白い。第一目標の七合目着。日差しが嬉しい。一月なのに小屋の基礎が見えているなんて初めてだ。北峰は堂々として聳え、こちらにも「登るぞ」とフアイトが湧いてくる。しかしここ標高一〇〇〇mあたりから上部は空気が冷たく雪質が違ってきた。凍った木々の白いガラス細工の中をワクワクして歩き出したのもつかの間、だんだんと標高が高くなるにつれ中途半端な積雪のサラサラ雪にステップが定まらず、雪の足元がずり落ちる。左の谷に滑落しないように慎重に登る。真っ白なウサギの姿を見てホッと和む。北峰近く見晴らし

の良い所でワカンを装着していると、元気な若者がここまでのトレースのお礼を言つてサクサクと追い越して行った。若者のスピードは素晴らしい。我々も北峰からの稜線歩きはサクサクと、まだ幼いシユカブラ(雪の風紋)ではあるが冬山気分はたつぷりだ。青空と純白の粟の山頂到着。ヤッター！しばし山頂からの景色を楽しむ。下り始めるとまたもう一人登つて来た。今日は計四名様。小屋まで下り小屋の外で昼食休憩。晴れて良かった。それにしても今年の雪は大丈夫だろうか・・・

日向倉山 一四三〇m

令和二年三月七日(土)晴れ

奥只見シルバラインの開通が三月七日。それを待つて積雪期限定の日向倉山へGO！メンバーの足並み揃い図らずも令和二年の日向倉山登頂一番チームになっちゃった！新雪と霧氷の雪山景色を堪能。素敵すぎる。白い越後駒ヶ岳と中ノ岳、荒々しい荒沢岳の黒い岩肌、未丈ヶ岳へは尾根続きで条件が良ければ健脚者は日帰り可能とか。素晴らしい眺望！良い山を案内してもらった。充実した山行ができた。

二王子岳 一四二〇m

令和二年三月十五日(日)曇りのち晴れ

樹林帯は赤テープが案内してくれるので先回のイメージ通り歩ける。

二週間前出かけるもガスられて油こぼしの上部から引き返した経緯あり。今日は油こぼし上部一二五〇m付近からは、見通し良く避難小屋も登山者もはっきり見える。広い尾根の要所所に丈の長いポールがあり大事な目印案内役だ。時々雪煙が無い、バリツバリツと雪面を歩く靴の音が快い。【木々は雪の下で赤テープは結ばず、風は容赦なく吹き付けトレースはすぐ消える。ガスられたらアウト。】最悪のような状況を想定して旗ざお付きの赤旗を用意して来ないと私は二王子で迷子になるな。難しい地形だと再認識。山頂の風を避け小屋に入って休憩。避難小屋の手前わずかな区間だが新雪をかぶった凍結面があつたので帰りは軽アイゼン使用。山頂からの眺望、楽しみにしていた飯豊の稜線は頭が雲に隠れちよつと残念。本日の登山者は前泊一パーティ五人・山スキー一人・その他登山者一五人ほどか。この冬は極端な少雪で登山口へ続く林道も車OK。それでも五合目の積雪計で二mはあつた。

西蒲三山縦走 国上山↓弥彦山↓角田山へ

令和二年三月三十日(月)

まず降り口の角田浜に車を一台デポ。それから登山口の国上へ向かう。六時スタート。八時間一五分後角田山の桜尾根下山午後二時一五分、デポの車に到着。今年も元気に西蒲三山縦走できた。段差が急な樋曾山の登りは意識してゆっくり登り、今回は脚に負担なく疲れもなく登れた。歩き方(スピード)を工夫すればまだ大丈夫

そう。樋曾山の先でWさんにバツタリ会い「喝」を入れられ。パワーアップ！前日の降雪で全工程の九割くらいは泥濘、代掻き田んぼにハマってしまったようで閉口したが、最後は桜尾根のカタクリ、ユキワリソウを愛でながら嬉しいゴールだった。六回目も無事終了。後日、田んぼ中を散歩していると西の方向に国上山から弥彦山・多宝山・角田山のスカイラインが目に入る。あそこを歩いたと思うと自然と顔がにんまりほころぶ。

鷲ヶ巢山 一〇九三m

令和二年五月二日(土)晴れ

世の中大変なことになっている。コロナで緊急事態宣言。医療現場など最前線で苦労してられる方々に、我等は遊んでばかりで済まないと思いつつも……県を跨がず県内の山、三蜜避けてなるべく人の行かない山へこっそりと。難行苦行の山、行けども行けども頂上に着かない山、季節によつてはヒルがいるとの前情報、心して行く。前ノ岳、中ノ岳と二つのピークを目指し急な上り下りを繰り返して三つ目のピークが鷲ヶ巢山頂。古くからの信仰の山とのこと。春霞で展望はぼんやり。ほぼ夏道通りで進むが残雪を拾いながら上り詰めルートを失い、ヤブコギ二十mほど要したが地図を確認しながらすぐに夏道を探し出す。まだ元気のある往路が良いが、帰りは大変だった。激下りは落ち葉の下に石ころや木の枝が隠れていて、石車に乗ってふらつくやら、枝に引っかかるやら悪戦苦闘。山中で二人に会った。下山近く杉林で更

に二人とスライド。幸運にもヒルに遭遇しなかった。大事な約束、密集・密接・密閉は避けられた。ピンクのイワウチワの花がかわいらしく、白いタムシバは清々しく咲いていた。新緑とミツバツツジであふれんばかりの登山道は我々だけのもの。駐車場に着く頃、脚に痛みが・・・疲れた。でも初めての山へ無事行ってこれて良かった。



みんなの食堂 with コロナ

みんなの食堂運営代表 小林 邦子

三年前、平成二十九年五月より井栗公民館において、毎月第三日曜日に「みんなの食堂」の名称で食事の提供を始めました。

私達スタッフ一同は個食や健康寿命等、健康問題を考慮して安全な食べ物、人間身体に生きる力を与える本来の機能を持つ食材として自然農法産の物を中心に使用し、食事を作っています。

今年に入って新型コロナウイルスで大変な状況になりました。戦後間もない日本人は、平熱が三十七度あったのですが、七十年という年月をかけて体温を低下させ、現在は三十六度を切り三十五度代の人々が多くなり、一億総アレルギーという現状が生まれました。体温一度の差の免疫力は大変なもので、アメリカのNASA(アメリカ航空宇宙局)では、ドローンが出来た事によりそれを使って感染目的のウイルス等をまかれた場合、戦わずして人を制する事が出来る。しかし、体温が三十七度あれば免疫力が高くクリア出来る為、体温を三十七度まで上げる様にと言っています。現代医学が発達した現代でありながら、四大疾病といわれた生活習慣病は増える一方で、鬱病や精神疾患、認知症も増え続け五大疾病・六大疾病とも言われる状況にあり、更に新型コロナウイルスの感染も増えていく現状を改善していかななくてはならないと誰もが考えるところです。

今は亡き故・阿部徹先生(前・新潟大学院 医歯学総合研究科)の「免疫革命」の論文で、正に今この様に生きていったら良いか識る事が出来ると思います。戦後、限らない人間の欲望による経済最優先の社会構造の中で、気候変動、食に関する問題、健康問題、医療費の問題等々・・・、そして新型コロナウイルスまでも生み出されてしまいました。もう一度原点に帰り何が大切で、必要なか考える時となったのではないのでしょうか。免疫を高めるといふ点では食も大いに関係しているところでもあります。

その観点からも月一回ではありますが、これからも健康問題と向き合い「みんなの食堂」を継続していきたいと想います。



笹倉つてヤツは…

金子靖夫

「おい、オメたち！さあーめかつたら…。モモヒキをはいてこい！」
理科&技術教師の山田が渡り廊下の窓を開けて、叫んだ。

たまたま通りがかったオレは、何事かと校舎の中庭を窓越しに見た。中庭では、雪球を作り雪を被った松の木向け雪球投げをする笹倉・坂田・永井らの楽しそうな姿があった。笹倉は鼻水をたらしながら雪球を投げている。三人とも「ほーい」なんて適当に空返事している。雪球投げの仲間に加わりたい気持ちをおさえつつ、オレはウオッチングを続けた。トルネード投法や、横手投げ、下手投げ、セツトポジションからのクイック投法などなど、やりたい放題投げまくっている。

風邪をひかないように心配して声をかけた様子の山田は、中二のおバカ男子」のことはほつといて、貴重な昼休みの時間帯を暖かい教務室で過ごそうという体で、白衣のスズをなびかせて早々に立ち去った。

冬の男子中学生のコーデインイトは、ボトムが黒の学生ズボンか学校指定のジャージだ。アップは肌に近いほうから、下着↓ワイシャツ↓セーターなど防寒インナー↓学生服か学校指定のジャージの上着。こんな順番だ。いや、そんなことはどうでもいいのだが…。

その時の笹倉の姿が印象的だった。ボトムは黒ズボンで定番。問題はアップの方だ。動きやすいように上着は脱いだのだろう。アップは黄色と

黄緑色のヨシマ模様も鮮やかなツートン色ハイネックセーター姿だ。まるでガチャピンのようだ。

『笹倉つてヤツは…ガチャピンみたいだ』

中三に進級すると、オレは中一から続けていた陸上部に加えて技術家庭科部にも入った。笹倉は電気とか機械とかに興味があるらしく、一年の頃から技術家庭科部にいた。電子回路なんかにも詳しく、半田ゴテの扱いもうまい。顧問の山田にも一目置かれている存在で、三年になると部長に指名されていた。

なあ、笹倉。オメ、高校どうすんの？」

おれんち、親は母ちゃんしかいねえだろ。高校はあきらめて働こうかな」

部活を終えて、技術室で笹倉と進路のことを話した。

若林はどうすんの？受験勉強とか、始めてんのか？」

「いや。三〇〇〇mで春の北信越大会にいけそうなんだよな。まあ、全中は無理だろうけど…。春の大会が終わったら、マジ考えるさ。でも笹倉…。オメなら推薦で高専の電子科に受かるんじゃないか。奨学金の制度もあるしさ。山田に相談したらどうだ」

うん。奨学金制度かあ」

普段は先生のモノマネをやったり、女子の〇〇がアイドルの□□に似てる」とか、どーでもいいことを言っている笹倉が、いつになく真剣な表情で答えた。

このときの会話がきっかけになったのかどうかは、定かでないが…。

笹倉は高専の電子科に推薦で進学することになった。ただ、奨学金制度は使わず、新聞配達のアルバイトで学費を稼ぐことにしたのだ。

「笹倉ってヤツは…親孝行者だ」

オレは高校に進学してからも陸上の長距離を続けた。高校からは別のスポーツをやるのもいいかなと考えたのだが、クラスメートの近藤に誘われたからだ。近藤は隣の中学出身で、中二・中三と三〇〇mで全中にでていた。中三の春、北信越大会へ初めてでたオレは近藤と面識があった。オレは全国へいけなかったが、近藤は全国へいき、三〇〇m全中六位に入賞したヤツだ。若林君とボクの力で、全国高校駅伝の県代表をめざそうよ」なんて言われた。大学受験にちからを入れている進学校なのだが、駅伝に青春するのもいいかなと思った。

オレの高校と笹倉が通う高専は、同じJR路線内にある。最寄り駅から、オレの方は三駅目だが、高専は七駅目だ。笹倉とは毎朝駅で会う。新聞配達の仕事を終えて電車に乗る笹倉はいつも眠いのだろうが、オレとの会話につきあってくれる。

今、人感センサーを使った制御システムをやってる」笹倉はわけのわからない専門的なことを楽しそうに話す。高専も二年生になるとかなり専門的なことをやるらしい。

「なんかロボコンとか、目指すのか？」

うん。先輩達のチームにサポートで入る予定だ。そっちは駅伝、全国へいけそうなのか？」

三年生が引退したからな。近藤とオレがチームを引っ張って、なんとか

したいんだよな。去年は県二位で涙だったしな…」「けるさ。若林なら大丈夫だ」うん。笹倉もロボコンがんばれよ」お互い目標に向かって突っ走っている十七歳だった。

「笹倉ってヤツは…ロボコンに本気だ」

「若林、元気か？オレは最近やっとドイツの水に慣れたって感じた。八月に一ヶ月の休暇がとれるから、故郷で会おうぜ。ドルトムントの笹倉より」

ゼミ室でゼミの仲間達と「ローカルマーケットとグローバルマーケット」について議論していると、ケータイにメールがきた。笹倉からだ。

オレは仙台の大学へ進学して三年になった。一方、笹倉は高専を卒業すると国内大手の自動車電装品メーカーに就職した。取引先にドイツの自動車メーカーがある関係で、笹倉は一年前からドルトムントの技術センター勤務になっている。

「で、あとのくらいドルトムントにいるんだ？」あと一年くらいかなあ」八月の初旬。地元JR駅前にある居酒屋で久しぶりに笹倉と会っている。オレは大学に入ってから、競技としての陸上長距離はやめた。いまは、市民ランニングサークルに加入してマラソントレーニングをしている。そのおかげで、顔は日焼けして真っ黒だ。対照的に笹倉は季節感のない技術屋顔になっている。

「想い出話に花が咲く。笹倉が高専四年生の時、ロボコン全国大会で準優勝したこと。全国高校駅伝に出場できなかった反面、同僚だった近藤が関東の大学へ進み、箱根駅伝で活躍していること。などなど…」

な、若林。梨香のことだけだよ…。あいつオレと母ちゃんのことおもんばかつて、高校卒業したら、就職するなんていいだしてさ」

梨香は若林の妹で、いま高三だ。来春、卒業ということになる。

オレんところは、兄貴が地元の国立大学だったから、家計の負担が少なかったわけだけど。オレが仙台で私立だろ。やっぱり負担かけたくないから、奨学金とアルバイトで賄ってるよ」

うん。親の金をあてにしないから、オメは立派だ。でさ…。梨香の夢、看護師になることだつて、オメも知ってるよな。学費なんか、オレがなんとかするから、看護学校にいつて言ってるんだ」

そうだったな。梨香ちゃんが具体的に看護師になりたいって考えるようになったのは、小学校のクラス内でイジメにあつてからだったよな」

おう。あの時、オレ達は中三で、オメもオレも後先考えずに、小学校にどなりこんだよな。対応してくれた山中教頭がオレ達の言い分をよく聴いてくれてさ」

ああ。いい教頭だったなあ。母子家庭つてだけでイジメにあうのは理不尽だ。山中教頭も中学時代に父親を病気で亡くしてたんだよな。イジメ撲滅の先頭に立つてくれて…。最後は小学校と中学校のかきねを越えての交流会まで発展してさ。夢」をテーマに作文の発表会をやって…。梨香ちゃん、お母さんのような看護師になりたいって、堂々と発表したんだよな。それからイジメはなくなった」

うん。あの時はオメがいてくれなかったらどうなつてたか…。オレ一人じやとても小学校に乗り込もうなんて、ありえなかつたぜ。ありがとうな

若林。そうだよ…。夏休みの間に、梨香も誘つて三人でメシでも食おうぜ。若林からも看護師を目指せて言つてやつてくれ」

「置倉つてヤツは…。妹想いの優しい兄だ」

若林、梨香、新居でのスタートおめでとう。若林とは中学時代からの付き合いだけど、オメはオレの恩人だ。母子家庭のせいで、とかく卑屈になりがちなオレとずっと親しくしてくれて、ありがとう。そんなオメが、まさか梨香のダンナになるとは…。全然信じられねえ。梨香が看護学校に行く頃から交際してたんだつてな。オレがドイツにいることをいいことに。なんだよ、勝手にオメエ達は！でも二人から報告受けた時、最高にうれしかったぜ。母ちゃんも言つてたぞ（若林君なら絶対大丈夫。梨香を一生守ってくれるよ）つてな。もし梨香を泣かすようなことがあつたら、いつでも仙台へなぐりこんでやるぞ。梨香も若林のこと頼むぞ。オレの大親友だからな。ま、アイツはマラソンで鍛えているから、少々の無理は利くだろうけど、大事にしてくれよ。それから若林、オレをお義兄さんと呼びなさい。ま、とにかく…。二人して幸せな家庭を築けよ。じゃな」

大学を卒業したオレは、仙台で食品関連の会社に就職した。社会人二年目に入った早々、オレは梨香にプロポーズした。梨香はオレとの結婚生活と看護師としての人生を仙台でスタートすることになったのだ。ドイツから帰国した置倉は、東京の府中にある技術センターでテクニカル主任として日夜、多忙な日々を送っている。オレと梨香は婚姻届をしたのみで、結婚式をあげていない。二人ともそんなことには興味なかつたし、家族もオレ達のことを尊重してくれた。

仙台泉区にある新居のアパートへ引越した日の夜のことだ。オレと梨香のスマートフォンが同時にコール音を発した。笹倉がメッセージ動画のメールを送ってきたのだ。

動画送ってくるなんて、お兄ちゃんらしいね」梨香はうれしそうな笑顔だ。

まったくだ。技術屋にありがちな寝不足気味の顔しちゃって。なにが、お義兄さんだ。誕生日はオレの方が早いんだぜ…。笑っちゃうよ。そうだ、梨香ちゃん…。今度、笹倉と故郷のお母さんを仙台に呼んで、牛タンを「ごちそうしないか」

うん。いいね。よし、私もお母さんに負けない、いい看護師になるぞ」それと同時に、オレのいい奥さんになつてくれる？」

はい」

笹倉からのメッセージ動画を観終わると、オレは梨香を強く抱きしめた。

「笹倉ってヤツは…かけがえのないヤツだ。ありがとう。これからもよろしくな」



川柳く佐渡への修学旅行を終えてく

旭小学校 六年生

楽しいね 体験たくさん 佐渡ヶ島

五十嵐明美

三密を トキもなるべく かいひしたい

矢坂晟太郎

たたこう館 ドンドンたたく 和のたいこ

笠原 莉桜

万長の 貸し切り風呂で 大はしやぎ

矢代 大稀

たたこう館 たいこでみんな スツキリだ

小林茉夏花

たらい舟 こぐと気持ちいい 楽しいな

湯澤 暖

はく力感 大きくひびく 佐渡太鼓

小林れいら

進まない ぐるぐる回る たらい舟

米山 航平

たらい舟 ぐるぐる回る 目が回る

酒井 真緒

ドンドコと たたくたいこは いい音だ

竹之内光希

佐渡金山 夏の暑い日 天国だ

鶴巻 凜乃

人間と たいこの会話 楽しいな

ナラガマガあゆみ

かわいいね いっぱいいるよ トキの群れ

西村 心花



作詞 めおと温泉姫小百合

長橋正宣

一、生まれた月日は 違つていても
おれより先に 死ぬなど言つて
いたわるあなたの 心がしみる
夫婦温泉 いのちの絆
結ぶ花だよ 姫小百合。

二、花にひかれて 温泉の里へ
愛のふるさと やすらぎどころ
山の雪どけ 流れのほとり
青葉がくれの 谷間に咲いた
愛の花だよ 姫小百合。

三、苦劳かけたと 肩もみあえば
胸にしみじみ 幸せ満ちて
通うぬくもり いでゆの香り
としはとつても 心の庭に
かおる花だよ 姫小百合。

作詞 おもかげの女

長橋正宣

一、白いうなじを かたむけて
だまつて見ていた あかね雲
わかつてほしい この胸を
知らぬふりして 遠ざかる
ああ年上の女 おもかげの女。

二、眠れぬ夜を 夜もすがら
想い出させる 濡れまつげ
若いと君は いうけれど
恋の炎を かきたてる
ああ年上の女 おもかげの女。

三、山のいで湯の 湯けむりに
溶けて愛しい 雪の壁
春になつたら 咲きますと
指にからめた 白い指
ああ年上の女 おもかげの女。

俳句

井栗公民館 俳句作り会

幼な子の漕ぐ自転車に風光る
葱の葉に蟬の脱け殻しがみつ
茄子漬を帰省せぬ子に送りけり

阿部孝子

香りにも焦点合はせ梅を撮る
ポイ捨ての禁止札立つ田植時
盆果てて茄子漬だけの昼餉かな

野口明

山茶花の散り残した庭の石
風呂吹き味のしみたる夕餉かな
桜見て知らぬ同士の感嘆符

井上道子

初笑ひ乳歯一本抜けてをり
銅鑼響く弁天堂や花の雲
梅雨晴れや裏返し干す青いシャツ

野口良子

風なきも涼しき朝や茄子の花
寒中の波も馳走にいとこ会
ふるさとは朝日の中の稲穂かな

捧笑美子

手習の半紙のゆくへ青嵐
黒塀の主役となりし凌霄花
百年に一度とといふ梅雨出水

山桜桃

甘藍と呼びたる義父の手の強し
老いし母蚕豆をむく七つ八つ
道田畑川とみまがふ梅雨出水

鈴木ときよ

日溜りを背に受け急ぐ冬囲い
梅雨晴や地蔵の顔の慈悲に満ち
雨打たれ地に落ち白き沙羅の花

足立一雄

梅雨晴れの百合の白さや登山道
猫も来て端居にのびてまどろびぬ
稽古着を脱ぎ捨てしばし夏の風

中川絹子

友からの手紙開封若葉風
百日紅空席を待つ茶房前
鈍色の川面輝く小春の日

石井紀子

携帯の電池切れるや草いきれ
八月の客を迎へる床柱
朝夕に西瓜叩いてみたりして

石川 鯨太

ポスターに税還元と鯛焼屋
立春のジムの活気や空きを待つ
夏木立ついつしか闇を抱きけり

大野 紫苑

紋白蝶風に戯^そへて気ままなり
清流に郭公の声響き合ひ
青田風鋏打つ人のリズムかな

重泉 雅子

黄ばみたる母の形見の白日傘
梅雨冷の開きしままのノートかな
蓮青葉田の面^{おも}なべて埋め尽し

清野 薫

掌^{てのひら}の光豊かに今年米
炎天の山迫りくる過疎の村
目覚めれば今日もウィルス重き夏

関 宏士

倅^{ひび}せの罅かと思ふ鏡餅
葉桜の木漏れ日深く散歩道
仏壇は今年も白いカーネーション

多田 宗栄

しぐるるや友の名遺る住所録
留学の孫と年賀の時差メール
見送りの駅それぞれの弥生かな

平松 正子

母の日に届く都の具合せ
その昔稲舟の田と聞きをりし
遠き日のアンネの窓も月あかり

藤田 幸子

夕端居子に遺す庭広がらず
麦藁帽一年生に大き過ぎ
死ぬ時も長子は生家吾亦紅

佐藤 伊久雄

俳句 四季

久和原 賢

一月(睦月)

生きてゐることの嬉しさ賀状書く
志 少 し 高 く し 初 句 会
逃げ足の早き日を追ひ冬耕す
一病を癒し一病去年今年
子等帰る三日の部屋の広さかな
あの山も一つ歳とる初日かな
傍らに妻ゐる余生冬ぬくし

二月(如月)

あたたかや一木一草影をもち
三行でこと足る日記冬灯
無添加の空気がうまし木の芽出づ
大根のどこを切っても過疎の村
植木屋の切つて眺めて日脚伸び
手を振れば影も手を振る春隣
昨日より佐渡がよく見え良寛忌

三月(弥生)

卒業は出発なりと説く祝辞
雪吊を解かれ木々の踊りだす
寝案じに決めたる場所に種を蒔く
鋤入れて啓蟄の虫おどろかす
耕して村は大きくなりにつけり
とびきりの越後日和に蒲団干す
口下手な人を信じて苗木市

四月(卯月)

前山のみどりもろとも畔を塗る
さらさらと種蒔く土を篩ひけり
一途てふ言葉大好き揚雲雀
春耕や土の匂ひを裏返し
信濃川菜の花色に昏れにけり
育苗の箱八百の芽吹きかな
耕すは心たがやすごときかな

五月(皐月)

田を植ゑて弥彦の裾野広げたる
早苗田の青に溶け込む越後線
百枚が一枚となる青田かな
この郷に生きる広さの青田かな
捨て苗の大地を掴む力かな
受領印押す母の日の宅急便
十葉や身に流れゐる義民の血

六月(水無月)

更衣今日より風を着て歩く
一行詩のみの近況鉄線花
山川も空も大気も夏に入る
俎板の乾き切つたる夏の風邪
薫風にはずす第一釦かな
馬鈴薯の花を数へて日暮れけり
活着の植田一枚づつの貌

七月(皐月)

太陽が箱いっぱいトマトかな
梅雨明けや坐ってなんかゐられない
表札に一人増やして風薫る
等分に切りし西瓜に集まる目
比べてはならぬ幸せ茄子の花
太陽が桃に桃色つけてゆく
品格は滲み出るもの白薔薇

八月(葉月)

離農して秋待つ心失せにけり
何もなき農舎の中を秋の風
整備する農機はいずこ夏逝きぬ
生涯に生業一つ稲の花
逝きし子の遺影見てゐる夏座敷
大西瓜腹で支へて運びけり
一村を動かしてゐる雨後の蟬

九月(長月)

畦みちも佛みちたり畦秋忌
菜園はわが城なりし敬老日
八十は余生にあらざとろろ汁
よろこびは分ち合うべし新走り
豊の秋百姓朝から声弾む
手を洗ふ蛇口に残る暑さかな
秋気澄むにわか庭師の鉄音

十月(神無月)

どの木にも夕暮れがきて秋の蟬
自分史は農日記なりちちろ鳴く
余生まだ橋の途中や冬近し
開封日記し八珍柿送る
肥樽を重ねて離農秋深し
片意地を秋風さつと持ち去りし
新米に一汁一菜あればよし

十一月(霜月)

捨てられて捨てし百姓山眠る
朝寒や交す言葉のみじかくて
文化の日一の矢発する音直に
妻の爪切って勤労感謝の日
離農して傍観をして年暮るる
働いてこそ短日とおぼえたり
一山の奥の一山年の暮

十二月(師走)

あの薬この薬また雪となる
投薬の待つ間も年の流れけり
遠嶺まで一枚となる冬田かな
寒卵一氣に未来のみこみぬ
かの山とかの川ありて年暮るる
地の穢れ白に包みし今朝の雪
十二月しみじみ眺む八十路の手

あとがき

委員長 川越 正蔵

文集「伊久礼」

発刊委員

委員長 川越 正蔵

委員 西山 厚子

委員 力石 岩男

委員 大山 隆夫

委員 佐藤 太郎

今年は、一月中旬に日本で最初の新型コロナウイルス感染者が出てから日々の生活様式がすっかり変わってしまいました。感染拡大防止のため、公民館活動が自粛されたり、行事が取りやめになったりと多くの制限を受けてきました。そんな環境の中で寄稿してくださった皆様には心から感謝申し上げます。

井栗地域を知っていただくために始めた、お年寄りの体験談を聞き取りレポートとして今回も掲載させていただきました。お二人の方には心から感謝申し上げます。

コロナ禍の影響を心配しておりましたが、お陰様で無事に「伊久礼」を発刊することが出来ました。

今号から、事情により製本に経費を掛けないことになりました。そのため印刷等は業者に発注せず、コピー等を利用し手作りで製本に仕上げました。多少見づらい所があるかもしれませんが御了承ください。

今後も、皆様に楽しんで頂けるように努力して参りますので、皆様の御協力お願い申し上げます。

令和二年十二月一日

伊久礼 第六十六号

発行所 井 栗 公 民 館